

IV 資料

国際学術誌における読み聞かせ研究レビュー

足立 幸子

1. 本稿の目的

本稿の目的は、読み聞かせ研究の国際的な動向について、特に学術誌の掲載論文に焦点をあて、その研究をレビューすることである。

読み聞かせは、従来、我が国においては、文字が読めない幼児のもの、あるいは家庭において親が自分の子供に対して行うものという印象が強く、本誌のような国語科教育の学術誌には、読み聞かせをテーマとした論文は掲載されていない。日本読書学会の「読書科学」誌などにおいては、幼児に対する読み聞かせや家庭における読み聞かせの論文が、心理学研究の立場から掲載されている（例えば、中村1991、横山1997など）。しかし、小学校学習指導要領には、第1学年及び第2学年の「言語活動例」として、「昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと」が挙げられており、実際の教室の中では、読み聞かせが読むことの指導の一つとして用いられることが多くなってきている。また、中学年・高学年・あるいは中学生に対する読み聞かせの実施も数多く報告されている（例えば、村上、1999など）。このような現状を考えると、国語科あるいは学校における読み聞かせについても、学術的な研究を進めていく必要がある。

そこで、本稿では、研究を進める最初の段階として、国語科教育や読書教育に関する論文を掲載している国際学術誌の論文が読み聞かせをどのように研究してきたかをレビューする。

2. 「読み聞かせ」の定義と対象選択の手続き

本稿では、「読み聞かせ」を「大人が、子供に対して本などを読んで聞かせたり、子供と一緒に同じ本を読む場を共有したりすること」と定義する。大人とした理由は、レビューの対象に①子供による音読 (reading aloud) を含ませず、②親やボランティアなどにおける読み聞かせを含ませるためである。定義の後半は、「shared reading」と呼ばれている活動も含ませるためである。

前述の問題意識にそって、本稿では、国語科教育・読書教育を研究領域とする次の5誌 “American Educational Research Journal”、“Journal of Educational

Psychology”、“Journal of Literacy Research”、“Reading Research Quarterly”、“Research in the Teaching of English”を選定した^(注1)。これらを、教育に関するデータベース ERIC/CIJE を用い、定義の「読み聞かせ」(Reading aloud to others) で検索を行った。26編の論文がヒットしたが、そのうち、本稿の研究関心とは異なる1編 (Bauer, 2000) を取り除いた25編を、レビューの対象とした(巻末掲載)。

3. 読み聞かせ論文の内容

レビューした読み聞かせ研究論文には、二つの場がある。一つの場合は家庭で、親子間の読み聞かせとなる。これを取り扱った論文には、Busら (1995a) の研究、計8編がある。もう一つの場合は学校で、教師と児童・生徒間の教授場面が中心となる。これを取り扱った論文には、Feitelsonらの計17編がある。

以下では、研究テーマに応じて分類し、内容を説明する。そのテーマとは、家庭においては、①親子の相互作用、②読書能力の発達である。学校においては、①語彙力の伸長、②読解力の伸長、③読み聞かせのスタイル、である。要約にあたっては、学校における論文にスペースを割くようにし、各テーマについて若干の考察を加えた。

3. 1 家庭における読み聞かせの研究論文

3. 1. 1 親と子の相互作用

家庭における読み聞かせの中心的研究であり、8編中6編がこれにあたる。

Pellegriniら (1985) は、4～5歳の障害児30名と健常児30名の計60名とその親との読み聞かせにおける相互作用を描写した。その結果、障害児に対する読み聞かせは、健常児の高年齢の子供に比べて、より指示的 (more-directive) であるが、要求的でない (less-demanding) ことを明らかにした。

Arnoldら (1994) は、Whitehurst (1991) によって開発された「対話的読み聞かせ」(dialogic reading) という手法を母親に浸透させる方法を研究した論文である。母親たちの「訓練なし」「対面的訓練」「ビデオによる訓練」の3群のうち、ビデオを用いた訓練が最も効果的であった。

Busら(1995a)における重要な概念は、「安心」である。この論文では、3歳児の母・子に対して、読み聞かせの頻度と社会経済的地位を比較項目として、実験が行われた。まず、子供たちは母親から30分間引き離された。母子の再会后、母親による読み聞かせが行われた。低頻度・低地位の母親には、再会后、まず子供が安心する言葉がけをするよりも、読み方を訓練しようとするという不適切な行動が観察された。その結果、読み聞かせ時の安心感の重要性が指摘され、親子の相互作用モデルを構築された。またBusら(2000)は、読み聞かせにおける親子のコミュニケーションについて、異なる文化集団を比較した。スリナム系オランダ人、トルコ系オランダ人、社会経済的地位が低いオランダ人の親子それぞれ19組(子供は4歳)を被験者とし、家庭における文化の違いが読み聞かせの行動の違いとなっていることを明らかにした。

Smith(2001)は、自分の子供に対する自分の読み聞かせをケーススタディー(期間は2歳6ヶ月から3歳6ヶ月まで)として研究したものである。普通の紙の本と電子本(CD-ROM storybook)、言語経験アプローチ(Language Experience Approach)に基づいて作られた本(LEA storybook)を用い、これらの本の種類が、読み聞かせの相互作用にどのように影響しているかを、それぞれの特徴を描き出した。

Bergin(2001)は、読み聞かせは、幼稚園生と1年生における親子間の読み聞かせの、感情の質(affective quality)と頻度を研究した。32組の親子の読み聞かせを録音し、その相互作用を感情の種類に基づいてコード化した。さらにMANOVAという統計的方法でこれを分析した結果、子供が本を読み始める段階において、「愛情」「安全」などにラベリングしたやり取りが増加していることを指摘し、読み聞かせにおける肯定的な感情の必要性を論じた。

以上のように、親と子の相互作用に着目している読み聞かせ研究は、読み聞かせを読むことの教育の方法としてみるよりも、むしろ、読み聞かせ時に現れている親子間の感情的つながりやコミュニケーションの有様に関心を持っているといえよう。

3. 1. 2 読書能力の発達

上述のように、家庭における読み聞かせ研究は、親子間の人間関係に焦点をあてたものが多いが、それでも2編の論文が、読書能力の発達という読書教育的な視点から書かれている。

Yaden(1989)は、親が頻繁に読み聞かせを行っている3歳男児2名に対する2年間(合計75時間)の読み聞かせと、5歳男児4名・女児3名に対する72時間の読み聞かせを録音した。これを起こして、自発的な質問(それぞれ810、1915)を取り出し、分析した。分析の結果、質問は、絵についてが最も多く、次が物語の意味、そして語の意味となり、視覚上の形式(活字の並び、句読点など)についての質問は最も少ないことが明らかになった。

Phillipsら(1990)は、ニュージーランドの家庭における読み聞かせ(子供は3歳か4歳)を研究した。まず、家庭における読み聞かせが、高い割合で、子供主導であることを見出した。次に、よく知らない本であるが経験のあるタイプの本を使った読み聞かせが記録・分析された。それによると、親も子も、絵や活字に対してではなく、テキストの意味に注意を払っていることが分かった。最後に、両親は子供に対してストーリーの展開をはっきりさせるように読み聞かせをしていることが明らかされた。このことは、子供たちは入学前にすでに、物語の構成の意味についての知識を持っていることを示している。

以上の研究では、読書能力のうち、物語の意味を把握する力が重要であることを示している。子供たちは入学前に、すでに家庭の読み聞かせから、物語の展開に注意して本を読む経験をしていることが解明された。

3. 2 学校における読み聞かせの研究論文

ここには、厳密では学校ではないが、プレスクールやデイケアセンターなど、家庭ではない教育的場における読み聞かせも含めている。

3. 2. 1 語彙力の伸長

読み聞かせが語彙力の伸長に資するものであるかという問いは、多くの研究者が持ってきた研究課題である。本稿では、5編の論文を数えた。

Elley(1989)の研究は、ニュージーランドの7歳児・8歳児に対する語彙獲得の実験研究である。まず、7歳児の7学級で、ある物語(story)からとった語彙を見せ、その話を聞かせた後、教師の説明なしにその語彙を覚えさせたところ、15%がその語彙を獲得した。次の実験では、8歳児の3学級である物語を聞かせた後、その物語から取った語彙を教師の説明なしに覚えさせたところ、15%の語彙が獲得された。その比較として8歳児の3学級で物語を聞かせた後、今度は教師の説明を入れたところ、40%

が獲得された。なお、これらの語彙の獲得は、どちらの場合も永久的 (permanent) であった。

Sénéchal ら (1993) は、プレスクールの子供たちが読み聞かせから新しい語彙を獲得しているのかどうかを証明するために、次のような実験を行った。80人の4歳児・5歳児に、プレテストを行い、読み聞かせを行い、一週間後にポストテストを行って比較した結果、5歳児では4歳児よりも新しい語彙の記憶保持度が高かった。しかし、一回の読み聞かせでは、それらの記憶が表現語彙となるには不十分であることも示した。この結果を受けて、Sénéchal ら (1995) は、子供たち (4歳児) が読み聞かせを聞くことからどのように新しい語彙を学んでいるに着目する2つの実験を行った。積極的に反応している子供たち (読み聞かせ中に出された問いに答えたり、絵に対してラベリングを行ったりする) の群は、受動的に聞いているだけの群に比べて、多くの語を理解していくことが明らかにされた。

Robbins ら (1994) の実験では、51名の幼稚園生に週2回ずつ読み聞かせを行い、それまではよく知らなかった21の単語を、読み聞かせから習得することができたかどうか、テストを行った。その結果、読み聞かせによって文脈づけられた語は、文脈がない語よりは高い割合で習得された。しかし、語彙学習を目的とした学習ほどではなかった。つまり、読み聞かせの語彙習得に対する控えめな (modestly) 貢献が確かめられたと彼女らは結論づけている。

以上のように、読み聞かせにおける語彙習得の研究は、実験研究が多い。筆者らもこのような実験を試みたことがあるが、我が国においては実験研究を成り立たせるためのデータ (語彙力テストのスコア) がないために、その実現が難しい。これらの研究を参考とすることが重要であろう。研究結果の全体的見解としては、読み聞かせはわずかではあるが、語彙の習得に対して効果があると言える。なお、より厳密にこのことを研究するためには、様々に出された実験の数値から、トータルでどのようなことがいえるのかを明らかにする (このことを「統合する (synthesize)」という) メタ分析という方法がある。ただし、統合できるのは、統計的手法の、すなわち数字が出ている研究のみである (注2)。

3. 2. 2 読解力の伸長

Holmes (1985) は、大学生の読み方の4つのモード①聞き手に対して読み聞かせを行う、②自分自

身に対して音読する、③黙読する、④読み聞かせを聞いている間黙読をする、のどれが、学生の読解力伸長に効果があるかを研究した。筆者の定義からすると、④だけが読み聞かせの一種と認められる。48名の大学生がこれらの4つのモードを経験したあと、読解能力を測定する質問に答えた結果は、①が最も成績が高く、③がこれに続き、④が最も低かった。

de Jong ら (2002) らは、電子本 (electric book) という新しいメディアを用いた読み聞かせの研究に挑戦した。実験群の幼稚園児12名にはコンピュータの一部として電子本が与えられた。統制群の12名の普通の紙の本が与えられた。6回の読み聞かせ後のテストからは、普通の本の方が話の内容や句を理解するのに優れているという結果になった。しかしどちらの形式でも、子供が書きことばを自分のものにする助けとなることが確かめられた。

Dressel (1990) は、5年生の書くことの指導に読み聞かせを用いた。8週間の間、読み聞かせを聞き、それについて話し合い、自分独自の話 (story) を創作するということが続けられた。プレテストと比較して、ポストテストでは作文能力の増加が認められた。また、書かれた話の文学的質の向上も認められた。しかし、読書能力に有意差はなかった。

Feitelson ら (1986) 及び Feitelson ら (1993) は、イスラエルの子供たちに対する読み聞かせ研究である。イスラエルでは、文章や本はアラビア文字で書かれるが、読み書き能力の習得の問題は、アラビア語が難しいことである。なぜなら、多くの子供たちが入学前に使用してきた一般家庭の言語は、これと異なるからである。そこで、1986年の論文は、あまり読むことが得意でない1年生を対象とした。学級終了後20分間ずつ6ヶ月間アラビア語の読み聞かせが行われ、統制群では普通の学習活動が行われていた。結果は、デコーディング、読解力、積極的な言語使用において、実験群が統制群を上回っていた。これを受けて1993年の研究は、社会経済的地位の低い幼稚園児258名に、教師の読み聞かせを5ヶ月間毎日聞かせた。実験群の子供たちは、聴解力と絵をもとに話をつくる力 (picture-storytelling) において、統制群 (教育省の進める普通の教育のみ) よりも高い成績を示した。特に後者の力は、1%の優位水準で、「節の構成力」「節と節の接続表現」「終末の使用」において優れていた。これらの結果は、家庭の

言語と異なる言語の読み書き能力の向上に、読み聞かせが有効であることを示唆するものである。

これらの研究結果を踏まえた Rosenhouse ら (1997) の論文は、読み聞かせがイスラエル 1 年生の読み書き及び読解力に対して効果的であることを、様々な側面から示した実験研究である。1 年生 339 名に対して、3 つの実験群と 1 つの統制群が設定された。第 1 群では、教科書に掲載されている物語が読み聞かされた。第 2 群では、1 人の著者による異なる物語が聞かされた。第 3 群では、第 2 群と同じ著者の、シリーズもののみが扱われた。全ての実験群では、読み聞かせの前・途中・後に、教師との言語的交流が奨励された。統制群は読み聞かせに関係のない活動を行った。週 5 回 6 ヶ月間継続後の結果は、①実験群全般において、1 年生の教室で継続的に行われる読み聞かせが、読み書き能力や読解力、絵をもとに話をつくる力に関して効果的であった。②読み聞かせ前・中・後の言語的交流がこれらの力を促進することが分かった。③シリーズものを扱った第 3 群の子供たちが、余暇時に自主的に本を購入して読んでおり、シリーズものが子供の読書興味を高めていることを証明した。

Sipe (1998) と Sipe (2000) は同じ研究である。前者は博士論文が国際読書学会の 1998 年度博士論文賞に選ばれたという報告で、後者は、学術誌の研究論文として書き直されたものである。これは質的方法の典型例で、1 年生と 2 年生に対する読み聞かせ記録テープ 83 本のうち、読むことの理解場面に焦点をあてて 45 本を選んで記述し分析した。その結果、読むことの理解には「テキスト分析」「テキスト間のつながり」「個人的つながり」「物語の世界と子供の現実世界が重なる適度な物語との関わり」「創造的表現のための基礎・事前段階としてのテキストの利用」の 5 側面があることを明らかにした。そして 5 側面に基づき、子供がどのような過程を経ながら読むことを理解していくかというモデルを構築した。

Morrow (1988) は、3 つのデイケアセンターで、社会経済的地位の低い 79 名の 4 歳児に、読み聞かせの実験研究を行った。2 つの実験群のうち、第 1 群の子供たちは、毎週異なった本を 10 週間読み聞かせられた。第 2 群の子供たちは、3 冊の本だけが繰り返し読み聞かせられた。実験群では、大人と子供との間の相互作用的な行動が奨励された。これに対し

て統制群では、伝統的な読書レディネス活動が行われ続けた。結果は、実験群では、数多くの複雑な質問やコメントが子供たちから挙げられ、その数が増加していったことが確かめられた。特に、3 冊の本だけを繰り返し読んだ子供たちは、活字そのものや物語の構造についてのコメントが多く出され、能力の低かった子供たちに対して、最も効果的であることが明らかになった。

一方、Purcell-Gates ら (1995) は、社会経済的地位の低い子供たちのうち、スキル学習中心の学級と、ホールランゲージ中心の学級を比較した。両者とも、1 年生の終わりまでに、読み聞かせによって高い言語知識が獲得された。中でもホールランゲージの学級では、スキル学習を中心の学級に比べて読み聞かせとその本についての話し合い、読むことや書くことを探究する経験が豊富にあり、彼らは言語知識の習得に重要であったと結論づけている。

この分野の研究には、社会経済的地位の低い子供たちに言及したものが多し。彼らの家庭環境では、読み聞かせの機会や触れる本の数自体が少ない。学校現場でそのような子供たちにどのように読むことを教えていくかが国語科教育の深刻な問題となっていることを反映している。

3. 2. 3 読み聞かせのスタイル

読み聞かせのスタイルとは、読み聞かせの場のセッティングから読み手の読み方の癖まで広い範囲のものを含む。学校における読み聞かせ研究の中では、比較的新しい分野である。

Morrow ら (1990) は、読み聞かせに最適な子供たちの人数を探究した。幼稚園生 27 学級を対象とし、1 対 1、小グループ (3 名)、学級全体 (15 名) の 3 つの大きさの集団における読み聞かせを行い、その後読解力テストを行った。結果は、小グループが最も高い成績をあげ、次に 1 対 1、学級全体は最低であった。読み聞かせの内容をみると、1 対 1 の場合は、その子供に合わせて行われるので、その子はより多くのコメントや質問をする機会に恵まれる。しかし、小グループはよりも多くの相互作用があり、これが高い成績につながったと推測されている。

Martinez ら (1993) は、6 名の幼稚園教師が同じ 4 冊の本 (storybook) を読み聞かせているのをビデオに録画し、記述して検討した。その結果、教師の読み聞かせには、①読んでいる間の教師の話 (talk)、②読んでいる間に交わされる、教師と子供たちの間

の話の情報、③教師によって用いられる教授方略、という3つの側面があることを発見した。さらに、これらのデータを質的及び量的方法で分析し、それぞれの教師のスタイルがどのように構成されているかを明らかにした。この論文は、子供の読み書き能力の発達において、教師の読み聞かせスタイルの多様性を研究する必要性を示したものとなった。

Dickinsonら(1994)の研究は、最も語彙習得や読解力の伸長に効果にある読み聞かせのパターンを探した。この実験では、4歳児の24学級で「共同構成的」「対話・相互作用」「パフォーマンス的」の3つのスタイルの読み聞かせが行われた。1年後、語彙力テスト(PPVT-R)と読解力テストをいった結果、語彙力については、パフォーマンス的読み聞かせが最も効果があることが明らかになった。また、読解力についても、パフォーマンス的読み聞かせがわずかながら対話・相互作用的読み聞かせを上回った。

以上のような、読み聞かせのスタイルについての研究は、学術的でありながら、読み聞かせ実践に対して直接役立つ情報を提供するものである。我が国の読み聞かせでは、国民性もあるのか、一般的に受動的な聞き手や淡々と読む読み手が広く受け入れられている。ここにレビューした研究結果が我が国についても通用するのだろうか、すなわち、積極的な聞き方を奨励し、パフォーマンスや相互作用的要素の強い読み方にすることが、効果的な読み聞かせとなるのか、研究を要すると言えるであろう。

4. 考察

4.1 研究が行われた国と研究対象の子供の年齢

4.1.1 国

本稿がレビューの対象とした国際学術誌の読み聞かせ論文は、25編のうち、15編がアメリカ合衆国、3編がイスラエル(Feitelsonら(1986)、Feitelsonら(1993)、Rosenhouseら(1997))、3編がオランダ(Busら(2000)、Busら(1995a)、de Jong(2002))、2編がカナダ(Sénéchalら(1993)、Sénéchalら(1995))、2編がニュージーランド(Elley(1989)、Phillipsら(1990))における研究である。これらは、読み聞かせが家庭においても学校においても、世界的各地で行われていることを示している。一方で、社会的地位や親の収入の違いを前提したアメリカの論文(例えば、Mollowら(1994)、Purcell-Gates(1995)など)や、民族や家庭文化の違いに着目したオランダの論文(Busら(2000))、家庭言語と読み書き言

語が異なるイスラエルの論文(Feitelsonら(1986)、Feitelsonら(1993)、Rosenhouseら(1997))などは、我が国にはない研究視野を与えてくれる。

しかし、実際の研究者の執筆の数は、多くの論文が、他の論文と同じ執筆者によって書かれているので(例えば、Bus、Feitelson、Mollow、Sénéchalなど)、実際に、学術的な読み聞かせ研究を行っている研究者はさほど多くはない。彼らは読み聞かせを長いスパンで継続的に、また様々な角度から研究しているのである。これらの研究は読み聞かせ研究の中心に位置するものであり、筆者のように我が国において読み聞かせを研究する場合でも、これらの成果を踏まえていくべきである。

4.1.2 年齢

国によって、教育制度や、学校教育による年齢・学年の区切り方は異なる。

我が国では、5歳までが幼児とされ、6歳から小学校に入学する。幼稚園は主に4歳児と5歳児、ところによっては、3歳児を教育している幼稚園もある。加えて、心理学者との研究上の住み分けもあって、筆者は、小学生と中学生を研究対象としてきた。しかし、これらの国際誌上では事情は異なっている。例えばアメリカ合衆国では、幼稚園(K)は5歳児を指し、それ以下の子供たちはプレスクールと呼ばれている。また、アルファベットと発音の関係が複雑なため、単語が音読できるようになるのが3年生とされており、読むことの教育においては、プレスクール、K、1年生、2年生を一つのまとまりとして捉える。こうして研究を見直してみると、筆者(あるいは国語科教育)が対象外としてきた低年齢の子供に対する研究の成果にも、注目する必要がある。

本稿では、読み聞かせを利用して作文を学ぶ5年生の研究論文も扱った(Dressel, 1990)。この場合は、読解力育成とは違った意味で読み聞かせが用いられている。年齢における読み聞かせの目的の違いなどは、一つ重要な研究テーマになると思われる。

4.2 読み聞かせ研究のトピック

トピックとは、先に述べた研究テーマと重なる部分が多いが、家庭・学校の両方の場に共通するトピックもあれば、レビューの分類としては用いなかったトピックもあるので、テーマとは区別してこの言葉を使って、それぞれを考察する。

4.2.1 親子関係・教師と子供の関係

本稿でレビューした論文のうち、6編は、読み聞

かせを読むことの研究というよりは、親子関係そのものの研究として扱われていた。これは、我が国では、秋田（1997）が行っている研究などである。学校における読み聞かせでは、指導法略の問題に帰結しがちであるが、その前提として、教師と子供の関係を研究することも今後の課題であろう。

4. 2. 2 語彙

語彙の習得は、学校での読み聞かせ研究の文脈で取り上げられていることが多いが、実は、家庭における読み聞かせこそ語彙がどのように発達しているのかを研究する必要があるのではないかと思われる。しかし、これは単に読み聞かせだけではなく、家庭における家族の言語文化と語彙習得の関係についての研究に発展するので、ここでは、語彙習得が広がりのあるトピックであることを指摘するにとどめる。

4. 2. 3 読むことの指導

読み聞かせにおいては、子供たちの意識は活字や単語に対してよりも、物語の意味や展開過程に向けられることを、家庭における研究（Yaden（1989）、Phillips（1990））は明らかにした。これらが発表された1990年前後は、読むことが学習者自身によって意味を生成する過程であるという構成主義が広く認め始められた時期であり、読み聞かせ研究でもこの主調を裏付けるような論文が発表されたと言える。

4. 2. 4 読み手のスタイル

本稿の「読み聞かせ」の定義では、読み手は一律に大人であり、「読み聞かせ」は子供のために行われるものであるから、「読み聞かせ」の結果子供がどうなるかということに焦点を向けがちである。しかし、教師のどのように読むかという「読み聞かせのスタイル」の研究（Morrowら（1990）、Martinezら（1993）、Dickinsonら（1994））は、読み手に焦点をあてた読み聞かせ研究という意味がある。

4. 2. 5 電子媒体などの新しいタイプの本

最後に、電子本という新しいタイプの本を用いた読み聞かせの研究が始められたことについて、触れておきたい。人間が紙の本を読むということについては、長い歴史と研究の蓄積があるのであるが、電子本は、研究が始められたばかりである。しかも、この研究が進められる速度よりも速く、新しい媒体が開発されていくことが予想され、どのような研究を行うことができるのか、未開拓の領域である。

4. 3 研究アプローチの傾向

最後に、研究方法に焦点をあて、増加あるいは減少しているアプローチを考察し、今後の読み聞かせ研究の展開や可能性を探る手がかりとする。

4. 3. 1 近年増加しているアプローチ

家庭においても学校においても増加してきているのは、質的方法を用いた記述的研究アプローチである。これは、読み聞かせ時に起こっていることを、ビデオやオーディオテープに録画し、それを徹底的に起こした上で、読み聞かせという現象を記述していくというもので、Sipe（2000）やSmith（2001）が代表例である。これらのアプローチは、一人の研究者であっても、数少ない聞き手であっても、時間をかければ行えるアプローチである。

4. 3. 2 減少しているアプローチとアプローチの多様化

対照的に、過去に非常によく行われ、近年はそれほどでなくなってきたのが、一連の語彙習得研究に見られる、実験的・統計的手法の大掛かりな研究である。これは、プレテスト後、実験群と統制群に分けて何らかの読み聞かせの実践を一定期間行い、ポストテストの成績に有意差があれば、その原因を読み聞かせに求めるといったものであった。多くの被験者（子供たち）の協力が必要であり、費用もかかり、たいしては、多くの研究者（3名以上）が共同で取り組む。我が国のように、教育研究費が多額とはいえ、実験的研究に用いられる語彙力テスト・読解力テストが豊富には存在しない現状では、実施が比較的難しいアプローチである。

しかし、実際のところはこの研究アプローチの減少の原因は、その難しさではなく、質的研究法の開発が進んだことにあると考えられる。先に述べたトピックとも関連するが、読み聞かせの子供（一般）に対する研究だけでなく、読み手のスタイルや、読むもの（電子本などの新しい媒体）に焦点を当てた研究に研究者の関心も向けられるようになった。その中で、アプローチも、大人数の大掛かりな子供一般に対する研究だけではなく、より微妙でより独特の研究アプローチがとられつつあるのである。

5. 結語

本稿では、国際学術誌5誌に掲載された読み聞かせに関する学術的研究25編を選び出し、(1)家庭における読み聞かせ、①親子の相互作用、②読書能力の発達と、(2)学校においては、①語彙力の伸長、②読解力の伸長、③読み聞かせのスタイルに分けて

レビューした。これらの研究が行われている国、子供の年齢、研究のトピック、研究アプローチの傾向について、考察を加えた。

謝辞

本稿の作成にあたり、イリノイ大学シカゴ校の Timothy Shanahan 教授と William H. Teale 教授から資料収集と研究の助言を得たことを御礼申し上げます。

注

1 国際読書学会 “The Reading Teacher” 中の読み聞かせ論文98編なども調べてみたが、これらのうち学術的な価値があると認められるものは、同じ著者が国際学術5誌のいずれかに学術的な形式で論文を載せているので、今回のレビューでは扱わない。学術的研究書（例えば van Kleek ら (2003) など）も、同じ理由から扱わないこととする。読み聞かせのレビューを含む論文・本の章として、注2で述べるメタ分析の論文の他に、Huck (1992)、Morrow ら (2000)、Teale (1981) などがある。出版年の都合からレビュー対象となる論文は異なるが、特に Morrow ら (2000) と Teale (1981) を参考とした。

2 読み聞かせのメタ分析の論文としては Scarborough ら (1994) と Bus ら (1995b) がある。しかしこれらも、やはり、統合されているものとの研究論文は、本稿のレビュー対象と完全には重ならない。

文献

レビューの対象となった論文

Arnold, D. H., Lonigan, C. J., Whitehurst, G. J., & Epstein, J. N. (1994). Accelerating Language Development through Picture Book Reading: Replication and Extension to a Videotape Training Format. *Journal of Educational Psychology*, 86 (2), 235–243.

Bergin, C. (2001). The Parent–Child Relationship during Beginning Reading. *Journal of Literacy Research*, 33 (4), 681–706.

Bus, A. G., Leseman, P. P. M., & Keultjes, P. (2000). Joint Book Reading across Cultures: A Comparison of Surinamese–Dutch, Turkish–Dutch, and Dutch Parent–Child Dyads. *Journal of Literacy Research*, 32 (1), 53–76.

Bus, A. G., & van IJzendoorn, M. H. (1995 a).

Mothers Reading to Their 3–Year–Olds: The Role of Mother–Child Attachment Security in Becoming Literate. *Reading Research Quarterly*, 30 (4), 998–1015.

de Jong, M. T., & Bus, A. G. (2002). Quality of Book–Reading Matters for Emergent Readers: An Experiment with the Same Book in Regular or Electronic Format. *Journal of Educational Psychology*, 94 (1), 145–155.

Dickinson, D. K., & Smith, Miriam W. (1994). Long–Term Effects of Preschool Teachers’ Book Readings on Low–Income Children’s Vocabulary and Story Comprehension. *Reading Research Quarterly*, 29 (2), 104–122.

Dressel, J. H. (1990). The Effects of Listening to and Discussing Different Qualities of Children’s Literature on the Narrative Writing of Fifth Graders. *Research in the Teaching of English*, 24 (4), 397–414.

Elley, W. B. (1989). Vocabulary Acquisition from Listening to Stories. *Reading Research Quarterly*, 24 (2), 174–187.

Feitelson, D., Goldstein, Z., Iraqi, J., & Share, D. L. (1993). Effects of Listening to Story Reading on Aspects of Literacy Acquisition in a Diglossic Situation. *Reading Research Quarterly*, 28 (1), 70–79.

Feitelson, D., Kita, B., & Goldstein, Z. (1986). Effects of Listening to Series Stories on First Graders’ Comprehension and Use of Language. *Research in the Teaching of English*, 20 (4), 339–356.

Holmes, B. C. (1985). The Effect of Four Different Modes of Reading on Comprehension. *Reading Research Quarterly*, 20 (5), 575–585.

Martinez, M. G., & Teale, W. H. (1993). Teacher Storybook Reading Style: A Comparison of Six Teachers. *Research in the Teaching of English*, 27 (2), 175–199.

Morrow, L. M. (1988). Young Children’s Responses to One–to–One Story Readings in School Settings. *Reading Research Quarterly*, 23 (1), 89–107.

Morrow, L. M., & Smith, J. K. (1990). The Effects of Group Size on Interactive Storybook Reading. *Reading Research Quarterly*, 25 (3), 213–231.

Pellegrini, A. D., & Sigel, I. E. (1985).

Parents' Book-Reading Habits with Their Children. *Journal of Educational Psychology*, 77 (3), 332-340.

Phillips, G., & McNaughton, S. (1990). The Practice of Storybook Reading to Preschoolers in Mainstream New Zealand Families. *Reading Research Quarterly*, 25 (3), 196-212.

Purcell-Gates, V., McIntyre, E., & Freppon, P. A. (1995). Learning Written Storybook Language in School: A Comparison of Low-SES Children in Skills-Based and Whole Language Classrooms. *American Educational Research Journal*, 32 (3), 659-685.

Robbins, C., & Ehri, L. C. (1994). Reading Storybooks to Kindergartners Helps Them Learn New Vocabulary Words. *Journal of Educational Psychology*, 86 (1), 54-64.

Rosenhouse, J., Feitelson, D., Kita, B., & Goldstein, Z. (1997). Interactive Reading Aloud to Israeli First Graders: Its Contribution to Literacy Development. *Reading Research Quarterly*, 32 (2), 168-183.

Sénéchal, M., & Cornell, E. H. (1993). Vocabulary Acquisition through Shared Reading Experiences. *Reading Research Quarterly*, 28 (4), 360-374.

Sénéchal, M., Thomas, E., & Monker, J-A. (1995). Individual Differences in 4-Year-Old Children's Acquisition of Vocabulary during Storybook Reading. *Journal of Educational Psychology*, 87 (2), 218-229.

Sipe, L. R. (1998). IRA Outstanding Dissertation Award for 1998: The Construction of Literary Understanding by First and Second Graders in Response to Picture Storybook Read-Alouds. *Reading Research Quarterly*, 33 (4), 376-378.

Sipe, L. R. (2000). The Construction of Literary Understanding by First and Second Graders in Oral Response To Picture Storybook Read-Alouds. *Reading Research Quarterly*, 35 (2), 252-275.

Smith, C. R. (2001). Click and Turn the Page: An Exploration of Multiple Storybook Literacy. *Reading Research Quarterly*, 36 (2), 152-183.

Yaden, D. B. Jr., Smolkin, L. B., & Conlon, A. (1989). Preschoolers' Questions about Pictures,

Print Conventions, and Story Text during Reading Aloud at Home. *Reading Research Quarterly*, 24 (2), 188-214.

その他の文献

秋田喜代美 (1997) 読書の発達過程 風間書房

Bauer, E. B. (2000). Code-Switching during Shared and Independent Reading: Lessons Learned from a Preschooler. *Research in the Teaching of English*, 35 (1), 101-130

Bus, A. G., van IJzendoorn, M. H., Pellegrini, A. D. (1995 b). Joint Book Reading Makes for Success in Learning to Read: A Meta-Analysis on International Transmission of Literacy. *Review of Educational Research*, 65 (1), 1-21.

Huck, C. S. (1992) Literacy and Literature. *Language Arts*. 69 (7), 520-526.

Morrow, L. M. & Gambrell, L.B. (2000). Literature-Based Reading Instruction. In Kamil, M. L., Mosenthal, P. B., & Barr, R. (Eds), *Handbook of Reading Research Vol.3*, 563-586. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Scarborough, H. S. & Dobrich, W. (1994). On the Efficacy of Reading to Preschoolers. *Developmental Review*, 14 (3), 245-302.

Teale, W. H. (1981) Parents Reading to Their Children: What We Know and Need to Know. *Language Arts*, 58 (8), 902-912.

中村年江 (1991) 絵本の読み聞かせに関する心理学的研究—絵本の読み聞かせに関する変数と望ましい読み聞かせ条件の検討— *読書科学* 35 (4), 149-159.

村上淳子 (1999) 先生、本を読んで！—こころを育てる読み聞かせ実践論 ポプラ社

Whistehurst, G. J. (1991). Dialogic Reading: *The Hear-Say Method—A Video Workshop*. [Video]

van Kleeck, A., Stahl, S. A., & Bauer, E. B. (Eds). (2003). *On Reading Books to Children: Parents and Teachers*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

横山真喜子 (1997) 就寝前の絵本の読み聞かせ場面における母子の対話の内容 *読書科学* 41(3), 91-104.

(山形大学)

2004. 1. 31 発送